

『自然の理法 究めんと一稲葉正 不屈の人生一』

稲葉正先生米寿記念出版刊行委員会編

同書から、43年卒業生の投稿、「葉書」メッセージを抜粋しました。

稲葉先生の思い出 | 381頁

川名 和夫 (昭和43年卒)

私の高校時代は、皆さんも同様だったかもしれませんが、悩み多き時代でした。特に私の場合「色弱」というハンディを負っており、進路については人一倍悩んでいました。

私はすでに小学校高学年で「科学者か技術者になりたい」と進路を決めていましたが、当時は「色覚異常」というだけで医学はもちろん理工系の学部への進学が難しい状況でしたので、だんだん大学受験を具体的に考える状況になってくると気が重くなりました。

自分の目指している進路へ進めない、そんなことを考えていると勉強すら手につかないような状況で、何の科目も平均点以下となってしまいました。

そんな時、2年生になって物理の最初の授業がありました。先生は稲葉先生。買った教科書を持って行きましたが、先生が始めにお話しされたのは教科書のことでした。「文部省がうるさいので教科書は買ってもらったが使わない。これからはプリントを使って授業をする」とそんな内容でした。

本当に毎回プリントを配って授業をされ、また実験の機材も自作され熱心に教えていただきました。私の場合、稲葉先生に物理を教えていただいたのは2年生のときだけですが、今でも稲葉先生の授業は鮮明に覚えています。「受験のため」の勉強ではなく「学問として」の物理を教わったと思っています。そのことにより、物理だけは成績はあまり自慢できませんが、興味が持てる唯一の科目となり、結局自分の進路を決めるきっかけにもなりました。何が何でも理工系に進もうと。

授業だけでなく部活では「無線クラブ」に入っており、稲葉先生に顧問をお願いしていましたので、部活でもご指導いただきました。特に「ソニーの井深は、無線に熱中して勉強がおろそかになり、これではいけないと無線をやめ

た。だから君たちもあまり熱中してはいけないよ」という趣旨のお言葉もいただきました。ちょうど私の父にも同様のことを言われ続けていました。父も「反骨精神」旺盛であり、私が生まれた翌年にレッドパージにより職を失っています。その後も最後まで反骨精神は持ち続けていました。そんなことから私には稲葉先生と父が重なって映るようになりました。

私が高校を卒業した後、稲葉先生が川崎製鉄公害訴訟原告団長として活躍されていたこと、また今でもメディアにいろいろ発言されている姿は、頼もしく、また私たちの尊敬すべき先生だと今でも思っています。

これからもお元気にご活躍ください。

398頁 川名 和夫 昭和43年卒、2年に物理を受講、無線クラブの顧問米寿おめでとうございます。昨年の毎日新聞への投書を拝見し、まだ元気に発言されていることに感動いたしました。これからも末永く、お元気にご活躍ください。

「いわさきちひろ」とタクシーの思い出 | 382頁

奥山 悦男 (昭和43年卒)

昭和42年、高校3年時に稲葉先生の担任クラスとなりました。当時、私は物理劣等生でした。授業後、不明点・疑問点を食いつくように質問しました。先生は懇切丁寧に、私が理解できるまで教えてくれました。情熱で接してくれた熱血漢の先生でした。物理の授業は週2日だけでしたが、毎日放課後に必ずホームルームがあり、いろんなことを教えて頂きました。おかげで高校3年間の中で、大学入試前の1年間が一番楽しく、思い出に残っています。

先生が千葉高校に赴任する前に、福井県鯖江市内の師範学校（現在の福井大学教育学部）で教えておられたことを知り、私と同じ北陸の富山県出身で、私の故郷の福井県に住んでいたことがあるということで親近感を覚えました。

高校卒業以来、ずっと年賀状をお送りし、返信を頂いております。数年前からいろいろお手紙を頂いております。川鉄公害訴訟に関する直筆コピーが送ら

れ、パソコンでワードに打ち直し、お返しすることもしています。

私の実家のある越前市（元武生市）内の元高校教師の方が、平成18年に、いわさきちひろの母親「岩崎文江」の自伝を自費出版されました。岩崎文江さんが武生女学校で教師をされ、武生で長女ちひろさんが生まれたことを知りました。稲葉先生にその本をお送りしたところ、「ちひろさんのご子息松本猛氏の奥様・由理子さんは、千葉高校昭和46年卒で、私が教えた人です。ちひろ美術館の副館長として著作を頂いています。どういういきさつで松本善明さんの家の嫁になられたのか、興味があったので、一気に読み終えて徹夜になってしまいました」の返事を頂きました。いわさきちひろを通して千葉高校と私の故郷の越前市を結ぶ縁が有ることを知り、驚きました。

平成20年4月に、千葉市内で同期会が開かれた時、私はJR蘇我駅からタクシーで先生宅へ迎えに行きました。高校卒業以来40年振りの再会でした。最初は緊張しましたが、タクシーの中で、いろんなことを話しました。①「先生の大勢の教え子たちをご存じですか？」私の知らない多くの人の名前とその人達の経歴・エピソードをすらすら言われました。②「先生は現在どのように過ごされているのですか？」「元教え子達から毎日のように手紙が来ます。毎日いろんな人たちへ返事や手紙を書いています。一日10通以上書くことがあります」。ご高齢なので、足腰は弱くなっておられますが、頭はしっかりしておられます。その秘訣は毎日頭を使う生活をしているからだと感じました。

タクシー中の15分間は至福の時間でした。

米寿後も卒寿・白寿まで、元気に過ごして頂きたいと心から念じております。

410頁

奥山 悦男 昭和43年卒

高校3年時、稲葉先生がクラス担任でした。

私の人生の師である稲葉先生の米寿を心からお慶び申し上げます。福井県から参加します。白寿を祝う会にも参加させていただきます。

稲葉先生の物理ノート | 384頁

佐々木 敏由紀（昭和43年卒）

大学紛争のために授業のほとんどなかった大学では、自主ゼミという形での勉強会を開いたりしていましたが、私にとっては稲葉先生の高校での授業用の講義レジメが教養課程の物理学学習のまさに代替でした。管の径の違うところを流れる流体の流速と圧力を示すベルヌーイの定理は、稲葉先生の図入りの原理的な解説を含んだ説明は未だによく覚えています。また、同時期におられた旭爪先生推奨の解析概論の学習は数学授業の代替でした。

真偽は確認しておりませんが、両先生ともレッドパーズの吹き荒れた時代に先進的活動を進めておられ、千葉高に移られたと聞いていました。そのようなすばらしい先生方を擁しておられた千葉高の度量の広さを今しみじみと感じています。

学部3回生の時に職員組合と共同での学部長団交があり、威勢のいい若い研究者が学部長に議論を繰り出しており、すごいものだと感じていましたが、その彼は昨年度ノーベル賞を受賞した益川さんでした。名古屋から移ってきたばかりの勢いのある若手研究者でした。最先端の学問の推進とそれぞれ置かれた立場で最善を尽くす姿勢を尊敬しますが、稲葉先生にはその2点を教わった気がいたします。

理路整然とした授業を真摯に探求されていたのだと思います。物事を真摯に探求することは生き方の上でも不合理な川鉄公害についての対応でも教えてもらえるところです。唯我独尊でも困りますが、あるときには孤高を守る必要を身をもって教えていただいたと思っています。

この先もお元気で後進の方々や地域の方々の良い師であられることを願ってやみません。

国立天文台ハワイ観測所（すばる望遠鏡）勤務

「ファインマン物理学」勉強会の思い出 385頁

山越 裕 (昭和43年卒)

その本はずっしりとした重さがありました。大学3年の頃、小学校から大学まで同じ学校となった衣笠幸夫君から「稲葉先生達の物理の勉強会」に参加しないかとの声がかかりました。当時私は電気通信関係の学科に所属しており電磁気学が必修でその奥深さに多少関心があったこともあり、また、1、2年の頃のキャンパスの騒々しい雰囲気がおさまり、なんとなく「勉強しなくては」の気持ちがでてきたころで早速勉強会に参加することにしました。その教科書がその重い「ファインマン物理学」でした。著者は、1965年に日本の朝永振一郎、シュインガー氏とともにノーベル物理学賞を受賞したR.P. ファインマン博士で、カリフォルニア工科大学で行った講義をまとめたものでした。この勉強会の思い出もあり、卒業後30数年経ち学生当時の本が見当たらなくなった今でもこの本だけは本棚の隅に置かれています。

勉強会は当時市川にあった東京歯科大のキャンパス（現在東京歯科大市川病院）で同大学の教養課程で物理学を担当されていた林淳一教授がチューター役でした。メンバーは稲葉先生、朝生先生、高校の先輩でもあり同じ学部に通っておられたお嬢様のつゆさんとその友人、それと私達の6～7名での勉強会でした。月一回ぐらいのペースで夕方5時頃から8時頃まで、食事休憩をはさんで熱心な勉強会が続きました。夏には九十九里浜で合宿も行いました。稲葉先生はこの勉強会でも何時もと変わらず背筋をピンと伸ばし、淡々としかも説得力のある語り口で取り組んでおられました。

高校三年生の時、稲葉先生が担任でした。当時、私は勉強よりクラブ活動中心の生活。サッカー部に所属し、その年宿敵習志野高校を破り夏の国体に千葉県代表で出場することができ、さらに1月の全国高校選手権への出場も出来るかもしれないという状況にありました。当時運動系クラブ活動は三年になると遅くとも夏の大会が終わると引退、受験勉強に専念するのが普通でしたが、日頃より受験中心の授業に対し、物事の本質を見抜く本物の学問をと指導、実践されていた稲葉先生は、私が直面する大きな目標に取り組むことを暖かく見守ってくれた事を覚えています。

卒業後しばらくしてお会いしたのがこの勉強会。林教授や稲葉先生たちの議論は結構難しく多くの時間は聞き役にまわっていた記憶ですが、稲葉先生を始め皆さんの物理学や知識にたいするたゆまぬ探究心は、この本のはじめにファインマン博士自身が述べている「最善の教育とは、いい学生といい教師が直接の特別のつながりがある場合、一学生が考え方を論じ、ものごとについて考え、ものごとについて語る—そういう場合のみ可能だということ」を認識せざるを得ないことだ」との一節とともに今も深く心に刻まれております。

高校三年生当時、そしてこの勉強会、その後の同窓会等での稲葉先生のお話は一貫しています。どんなときでも背筋を伸ばし、淡々としかも信念にみちたお話をなされます。これは先生の筋を通すぶれない生き方そのものであると感じている次第です。

402頁 古屋 信明 昭和43年卒 物理を教えていただいた

稲葉先生へ 米寿をお迎えになるとのこと、本当におめでとうございます。いま第2の職場として、防衛大学校で教鞭をとっていますが、それだけに高校教育の大切さを感じています。先生の物理、本野先生の英語 etc. etc…私達は幸せでした。ありがとうございました。

414頁 衣笠 幸夫 昭和43年卒 3年I組担任

先生にお教えいただいた物理は今も私の『ものごとを考える上での原点』です。昨年、社内教育の『基礎が大切』の部分で、先生の手作り教科書の一部を引用することを、先生にお願いし、お許しをいただき、若手社員に説明させていただきました。ありがとうございました。

板見 潤一（昭和43年卒）

（その1）ご両親に見てもらえ！

高校で物理を教えて頂いた稲葉先生と個人的にお話をする機会はほとんどなかったが、黒澤明の映画に登場するような練達の古武士の風格があり、寡黙ながら強烈な印象を与える方であった。

予習復習の習慣が付いていない私などは、高校の怒涛のようなカリキュラムに対して、学校の授業中だけではこなせずにアップアップ。しかし本来理科好き少年だった私だから、様々な工夫が施されている稲葉先生の毎回お手製の物理教材には興味をひかれた。波動と気柱の単元だったか、長いビニールホースを持ってこられてラップ演奏をされたのには、クラス中がどよめいた。虹の理論も、どんなに入り組んだ海岸線にも波が直角に打ち寄せる理由も、夜間には遠くの音が何故聞こえ易いのか…等々、すべて明瞭な理屈で説明できることに、物質世界を明晰な理論で解明することの面白さを味わった。ただ、基礎学力を付けるための稲葉式授業前提出小テストはサボり続けていた。

ある日、やはりやってなかった宿題の小テストを、隣の生徒から借りて休み時間にサッと写して提出した。借してくれた友人が悪いわけではないのだが、ほとんどが×を付けられて返された。おまけに走り書きで提出したものだから、氏名欄には書きなぐった苗字だけ。そこに、赤鉛筆も折れよとばかりの筆圧でアンダーラインが引いてある。コメントに曰く、「点数のことは問わない。この無礼な書きようを、ご両親に見てもらえ！」

稲葉先生の高邁な物理の授業のどれよりも、私だけに向けられたこのメッセージは、数十年経った今でも強烈に響いている。教師の立場となったその後、「点数のことは問わない…」のコメントは、時に使わせて頂いている。

（その2）ダブルの折り返し

ある日の放課後、二階の教室の窓の下が騒がしい。稲葉先生のカミナリだ。ソッと窓から下を窺うと、生贄は長身の〇〇君。ズボンの裾を指して先生は怒っておられる。当時、男子のズボンはダブルの折り返しが当たり前の時代。制服としてのズボンなら当然ダブルでなければならないのだが、〇〇君は、別に流行の格好をしたがるタイプではない。急激な成長期ゆえ、きつと折り返しを延ばしてしのいでいたのだろう。彼は消え入りそうな声で稲葉先生に向かって約束している。明日までにダブルに縫い直してくるそう。シングルに伸ばしてもまだ短い彼の彼のズボンが、翌日どんな風だったか私は見届けていない。

（その3）U君の停学

中学から一緒だったU君がしばらく学校を休んだ。どうしたんだろうと思っていたら、噂では停学だとか言う話だ。「停学」という言葉にも、なじみがない。

何のことか判らなかつた。情報通の誰かが教えてくれた。

街中でU君、タバコを吸っていたらしい。そこに稲葉先生が通りかかった。U君、思わずタバコを捨ててお辞儀をした。その正直さが仇になったのだ。見逃してくれる先生でなかったのも、彼の不運だった。

（その4）遅れてきた女子

五十人のクラスに五、六人の女子生徒。物理の授業が始まり、一人の女子が遅れて教室に入ってきた。おもむろに稲葉先生曰く、

「いいかね、男子諸君。女性が遅れて入ってきても、紳士たるもの、その理由を聞いたりしてはいけないのだよ」

遅れてきた女子は赤くなって席に着いた。稲葉先生、今おっしゃる話ではないでしょう…と申し上げたかった。

（その5）いなばの露

稲葉先生は学校まで毎朝お嬢さんと並んで歩いておられた。一級上の先輩で我々後輩男子までにも人気ある美貌の才媛、そのお名前を「つゆ」と聞き知って、さすが稲葉先生、と皆唸った。古典の授業で『徒然草』の十六段を学んだばかりだったのだ。月明かりの下、笛を奏でつつ「稲葉の露」に濡れそぼち歩む貴公子の描写が、毎朝のお二人の姿に妙にダブって今も蘇る。

（その6）公害訴訟の先頭に～暗い山の絵

県庁の下をくぐって登校する毎日、脇を流れるのは、川というよりはコンクリートに囲まれた澗だ運河。その流れに魚が居たということがニュースになるほどだった。下校の黄昏時、彼方にはK製鉄の赤黒い火がボワーッと揺らいでいた。千葉高卒業後、当地に至ってどれほど経った頃だろうか、地元TVの全国版ニュースに、何と稲葉先生のお顔。K製鉄公害訴訟原告団の代表として活動しておられたのだった。潔癖にしてかつ情味ある先生の学問は、物理室の中だけには留まり得なかったのだ、としみじみ画面を眺めながら思った。

そういえば、先生の担任なさる教室の一番後ろには、先生ご自筆の山の絵が飾ってあった。あれは一体どこの山並みだったのだろう…。横長の暗い画面だったことを、うっすら覚えている。